

# ロゴマークの具体的な使用条件の詳細

「基準1」 ※この3つの視点のいずれかに該当すること	<b>① 急峻な山岳と生物多様性</b> ～三千メートル級の山々が織りなす極限の世界への冒険～
	■槍・穂高連峰を中核とする急峻な山岳や活火山である乗鞍岳・焼岳及びその山麓に広がる広大な高原を含む、我が国を代表する山岳地帯である。 ■山岳が急峻であるため、狭い範囲の中で大きな標高差と様々な地形が存在し、そこに変化に富んだ原生的自然が形成されている。 ■風・水流・火山活動等により刻々と変化する“生きた自然”があり、訪れるものを飽きさせない。 ■豊かな植物相とそれに応じた、多様な動物の生息が確認されている。ツキノワグマやニホンカモシカなどの大型哺乳類のほか、ライチョウ、ホシガラスなどの鳥類、様々な高山蝶類などが分布している。また、滝、清流、湖沼、樹氷など、多様な水資源も見ることができる。 ■こうした山岳がもたらす水や大地、空気などの恵みは、南部地域の暮らしをはじめ、遠く都会にまで恩恵を与えている。 ⇒南部地域の自然の特徴を意識したプロモーション、サービス等の開発につなげる。
	<b>② 山岳と人との関わりの歴史</b> ～「山や自然に神を見出し恵みに感謝する山岳観とアルピニズムとの出会い～
	■日本人の自然観では、山岳は信仰の対象であり、貴重な山の恵みを頂く場であった。こうした自然観は時代の変化の中で薄れつつあるが、神社や祭事、山での意識や行動の中にそれらが残っており、異文化から見ると魅力的な「和 (Japanese)」の要素となっている。 <日本人の自然観の特徴> ・名もない草花など万物に神性を見出すこと ・限られた資源を有効に利用し破壊しつくさない（循環的） ・地震、風水の災禍が多く、畏敬・畏怖すべきものと捉える ■また、19世紀後半に宣教師ウォルター・ウェストンが訪れ、この地域を「日本アルプス」として世界に紹介。これをきっかけに狩猟や信仰目的ではなく、登ること自体を目的とする登山（アルピニズム）が日本でも普及した。 ⇒南部地域における山岳と人との関わりの歴史を認識し、プロモーション、サービス等の開発につなげる。
	<b>③ 暮らしと自然との境界での滞在</b> ～自然の豊かさや偉大さを気軽・安心・快適に体感できる贅沢～
	■登山前後、あるいは自然散策や自然観察の拠点となる快適な滞在施設が南部地域には集積している。滞在施設には、ホテル、旅館、ペンション、ゲストハウス、キャンプ場など多様な選択肢があり、郷土食も含む多種多様な食事を楽しめる。 ■険しい山岳に登頂しなくても、山岳の傾斜や四季折々の自然を活用したスポーツを楽しんだり、宿泊施設の傍で星空観察をすることもできる。 ■火山活動の恵みである温泉の数や湯の種類においても日本有数の豊かさを誇っている。 ■国立公園内に居住している人がおりコミュニティがあることも大きな特徴であり、生活しながら訪問者を受け入れることで、暮らしの中で大切にしている地域資源や体験を提供することも可能になる。 ⇒南部地域において、自然の素晴らしさを気軽に楽しめるアクティビティやサービス、快適に過ごせる施設やサービスなどが多彩で選択可能であるという強みをプロモーション、サービス等の開発につなげる。



「基準2」	<b>④ 利用と保全の好循環による持続可能性の担保</b>
	■貴重な自然が集積している地域であるが、利用者数も多く多様化しており、自然保全・保護活動にも力を入れることが必要である。 ■地元の関係者が、保全・保護の活動を事業やボランティアとして行ってきた歴史があり、こうした活動により多くの受益者が参加していくことを南部地域のスタイルとして確立していくことが望ましい。 ⇒南部地域のこれまでの自然保全・保護の取り組みを、より多くの事業者や生活者が実践し、より多くの受益者との連携の中で進めていくことが持続可能な地域づくりや地域の価値の向上につながる。保全・保護活動に多くの主体を巻き込むとともに、その活動を広く周知するためのプロモーション、サービス開発につなげる。